

人口10万人の「南海の楽園」グレナダに米国が侵攻。対米非難続出でソ連が漁夫の利？ (WWP)



東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄

グレナダ侵攻で救われたソ連

米海兵隊のグレナダ侵攻作戦は、レーガン政権の将来に高価なツケをつきつけることになるばかりか、中長期的に見て、西半球におけるアメリカ

カの威信を大きく傷つける結果になりそうだ。

たまたまた来日したキッシンジャー元米国務長官は、レーガン大統領の中米問題に関する特別委員会委員長としての立場からグレナダ侵攻作戦を支持しているが、すでに、メキシコやコロンビアをはじめとするラテン・アメリカ諸国のみならず、旧宗主国のイギリスやラテン・アメリカ諸国と結びつきの深いスペイン、フランスも強く対米非難を展開しており、アメリカは著しい苦境に陥っている。

一方、当事者でもあるキューバのカストロ議長は、「ほんの少数の軍事顧問の場合を除いては、建設労働者と協力要員」しかグレナダにいないのに、それを「山岳地帯に五〇〇人のキューバ人がいたという米国スポークスマンの情報」は全くのウソである」と激しくアメリカに迫っている。

広がるソ連の影とキューバの精力的な活動にも「脅威」を感じてきたラテン・アメリカの大多数の国々をも、アメリカからさらに離反させるであろうことは疑いない。

最も得をしたソ連

そうしたなかで、六〇年代後半以降、中ソ対立の影響もあって関係が極度に悪化していたキューバと中国との間に最近改善の兆しが見えはじめ、去る一〇月中旬にはキューバのカプリサス外国貿易相が閣僚としては一八年ぶりに中国を訪れたばかりである。

その中国は、今回のアメリカのグレナダ侵攻に対して、中国外務省の齊懷遠・報道局長が一〇月二六日に「米軍のグレナダ侵攻はいかなる口実があろうとも、強国が弱国をいじめる、国連憲章と国家関係の基本的準則を著しく破壊する覇権行為である」と激しくアメリカを非難した。

務次官と会見した呉学謙外相は、鄧小平主任とモラン・スベイン外相との一〇月三〇日の会見に際して、「米国は中米諸国を恫喝するために軍事力を用いてきた。最近グレナダに軍隊を送り、全ラテン・アメリカ諸国の憤りと非難を招いた」とさえ強調した。

こうした連鎖反応は、米軍のグレナダ侵攻という局地的限定戦争も、たちまち大きな国際政治のイシューになり、大国間の新しいパワー・ゲームに影響を与え、現代世界の特徴を示し出している。

だが、短期的に見るならば、今回の米軍侵攻によって、もつとも得をしたのはソ連である。KAL機撃墜事件以来の全世界的なソ連批判の気流は、今度はアメリカに向かい、結局、ソ連の暴挙も米ソ新冷戦の産物であるという雰囲気も醸成されるであろうし、ワインバーガー訪中以来固まりかけた米中関係にも、再び冷たい気流が生じはじめたからである。